
かざぐるま

冴川明希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かざぐるま

【著者名】

Z1558Z

【作者名】

沢川明希

【あらすじ】

カカシの提案で木ノ葉の夏祭に参加することになった第七班。そこで手に入れたかざぐるまに、サスケは様子がおかしくなる。ナルトはサスケと兄・イタチの間にかざぐるまに関する思い出が在ることを知るが……。

カラカラカラ……

かぞぐるま

ベッドの上で大の字になつて熟睡していたナルトは、ふと耳慣れな
い音に目を覚ました。

目の前にはゆらゆらと揺れる、白い……

「……やつば、オレつてば窓開けつ放しじゃねーか

寝惚けた頭が一気に醒めた。吹き込む風に体をくねらせるカーテン
の透間から、時折夜空が見える。チカチカと瞬く星に、少し湿気た
風。

むくりと体を起して、窓の外を眺める。

「終わつちまつたんだな……」

もう、お囃子の音も花火の音もしない。
今日は 木ノ葉の里の夏祭だった。

カラカラカラ……

ナルトは音に釣られて、部屋の奥に顔を向ける。

カラカラ……

卓上に散乱したカツチラーメンの容器を横にどけて、ほんの少しだけ設けられたスペース。そこには古びたガラスの一輪挿しに、輝く赤い花ひとつ。

カラカラカラカラ……

白いカーテンが大きくはばたいている。風が吹くたび、赤い花が回る。微かな街灯の光を受けて、膨らんだ羽が白っぽく輝いている。ナルトはぺたぺたと床を歩き、そつと水の無い一輪挿しからかざぐるまを抜き取つた。

赤い赤いかざぐるまは、今は大人しく四つの羽を広げている。そのままベッドに戻り窓の外に腕を突き出すと、縁口で貰つたかざぐるまはナルトの手の中で回りだした。

「……花があるってのも、中々良いもんだってばよ」

赤い花に向かつてナルトはニッと笑いかける。

カラカラカラ……

羽が夜空の下で煌いていた。

* * *

今夜は木ノ葉の里の夏祭だつた。

毎年夏にその祭りは開かれる。沢山の食べ物屋の屋台も出るし、射的や輪投げ、金魚掬いといったちょっとしたアトラクションもある。けれど、ナルトはその祭りに一度しか行ったことが無かつた。

幼い頃に、一度。

皆樂しそうにしていたのに、ナルトを見るとその態度が一変した。結局いつものようにひそひそと冷たい目を向けて疎外する大人達と、遠慮と加減を知らない子供達に怪我の土産を持たされて追い出された。そこには酒に酔つた大人もいて、いつもより酷い目に遭つたから、ナルトはそれ以来祭りには行く気にならなかつた。だから今日はナルトにとって一回目の祭りになつた。昼間、第七班の任務が終わり、いつものように解散になつた後に事は始まる。

「そりだナルト、今日はお祭に行かないの？」

「え、お祭…？」

「何、忘れちやつたの？ 今日は夏祭じやない！」

「え…と、オレってばあんまり……」

ナルトが短い金髪を搔きながらソソリソソリと、サクラはビックリしたらしい。

「あんたが好きそうなもんばかりだから、絶対『今日行こひぜーーー』とか五月蠅く騒ぐかと思つてた」

そう言わると、苦しい。

確かにナルトが好きそうな物ばかり、なのだ。

焼き蕎麦・たこ焼き・綿飴・りんご飴にチョ「バナナ。食べ物だけではない。金魚掬いに輪投げや射的、籤もあるのだという。もごもご」と歯切れの悪いナルトは、直ぐにサクラの意識から消えてしまう。

「サスケくんは？ あの、も…もし良かつたら…あたしと一緒に…」

「オレは別に… あんなの子供の遊びだろ」

「つてんめー……せつかくサクラちゃんが誘ってくれてるの……！」

「つるせえ、ドベ」

「んだとオー！」

「まあまあ、落ち着け。ナルト」

ナルトがサスケに掴み掛けたのを、今まで黙っていたカカシが笑顔で引き離す。

「もう！あんたはそりやつて直ぐサスケくんに突っかかる…」

ナルトのサスケに対しての低過ぎる沸点は周知の事だから、今にも殴り合いになりそうな雰囲気も慣れたものだ。

「えー……でもよ、でもよオ」

「言い訳む・よ・う…！」

「じゃあさ、じゃあさサクラちゃん、オレと一緒に……」

「お断り」

いつもの如くいつもの様に繰り返される悲喜^{ハモ}_{ハモ}を眺めながら、カカシはぼりぼりとマスクで覆つた頬を搔いた。

「今年の夏は、過ぎちゃえばもう戻って来ないしねえ」

「そんなの誰だつてわかってるつてばよ」

「んーじゃあ、三人で行つてこれば？」

「！？」

「！？」

「…？」

サスケ、サクラ、ナルトと三人三様の反応を楽しむよつて、カカシ

は田を細めた。

「よし、決まりーー！折角だから俺も行こー！」

「ちょ…カカシー何だよ、それは…！」

「第七班で夏祭り。いーじゃない」

「良くねえよ！」

「お前さ、十分子供だから」

「ざけんな！！」

「えー！カカシ先生も来んの！？何か奢つてくれちゃつたりすんのかな？な、センセー！！」

「あーハイハイ気が向いたらね」

「よつしゃーーー！」

「じゃあ六時半にいつものところに集合、って事で」

「了解だつてばよー！」

「サボるなよ」

苦虫を噛み潰したようなサスケにカカシがボソッと囁く。

「それから…と。オーラ、サクラー！」

「あ、ハイツ…！」

「ぼーっとするなよ。女の子は準備に時間が掛かるんだろ？」「

三人で行つてこれば、と言われた途端内なるサクラは大はしゃぎで、正直彼女は間の会話を聞いていない。だがこれはチャンス、と拳を握り締めている彼女の傍らで、ありえない台詞が漏れた。

「あ…のさ、やつぱ、オレはいいや。三人で行つてきてつばよ
「ナルト？あんたどうしたの？」

わざのはしゃぎつぱりはビコへ行つたのか。流石にサクラも異常

さに気付くが、ナルトはうるさいと視線を彷徨わせるばかりだ。

「そ、そうだ！オレ、今日の分の修行しなきゃなんねえし……」

「ならオレもバス……」

「ダメ」

サスケの声を遮り、カカシは三人を見回した。この笑顔は彼らの経験上、あまりよろしくない。

「お前らねえ、もうちょっとチームワークとか磨いた方が良いよ。一緒にこういうイベント経験するのも大切な事だぞ。普段と違う環境だと、仲間の新しい一面を発見できるかも知れないし」

もつともらしく何言つてやがる。

サスケのそんな目も、カカシは意に介さない。だが普段なら参加したがらないサスケに文句を浴びせるだらうナルトが、黙っている。

「六時半な。それじゃ、解散」

「どうするんだつてばよ……」

別れ際、サクラは浴衣を着てくると言つていた。確かに祭りの日は浴衣を着ている人が多い。だが、ナルトは浴衣を持っていない。

（準備？何すりや良いんだ？）

いやー、楽しみ楽しみとカカシはさっさと去つていった。急がなきや、とサクラも駆けていく。ぽつんと残つたのは不参加希望の二人

だつた。

(聞いたときや良かった)

今更ながらそう思つもののサスケに訊くのも癪で、ナルトは意地を張つてしまつた。

『 今日、サスケも行くのかよ
『嫌なら途中で抜けりや良いだろ』

サスケの素つ氣無い横顔は、最近少し判るようになつてきた。サスケは、多分もつと他の理由で祭に行きたくないのだ。

何故、サスケは 。

考え込んでいたナルトは、窓から微かにオレンジ色の夕陽が差し込んでいるのに気付き、はつと目を見開く。

「やつべーー遅刻する……」

サクラちゃんの浴衣姿が見たい。

たこ焼き、焼き蕷麦、カキ氷…屋台の品を貪つてみたい。

目先の欲望はシンプルで、ナルトが取り敢えず動く為の理由をくれた。ナルトは大急ぎでシャワーを浴び、汗で汚れたTシャツを新しいものに替える。あれこれ悩んだり迷つ時間も、もつ無い。無いのだから、いつもの服で良い筈だ。

家から飛び出したナルトが息を切らせて集合場所に辿り着くと、まだ誰もいない。

「オレ、ついばみょつと早く来過ぎたのか？でも、……」

約束の時間だ。

もしかしてからかわれたのだろうか。まさか、カカシに限つてそんな事は。

ぐるぐると廻る不安な心の声に、急速にナルトの顔が曇つてゆく。だから突如掛けられた声に、ナルトは過剰に反応した。

「……何やつてんだ、ドベ」

「うわッ！サスケ！？」

「その木に何かあるのか？」

「へ、木？」

「ずつと見てただろ？」「が

「な、何でもないつてばよ！」

立ち廻くしていたのを悟られまいと、ナルトは派手に笑つて誤魔化す。変なやつ、と横田のサスケが言つている。妙な雰囲気になりそうで、ナルトは大急ぎで話題を探すと、それは案外直ぐに見つかつた。

「あ、そうそう、サスケも浴衣着てる人多いじゃん」

「浴衣ア？」

「ほ、ほら祭の日は浴衣着てる人多いじゃん」

「あんなの、どこに仕舞つてあるのか知らねえよ。着る気もねえ

「そうだよな！わかんねえよな！――」

しん、と沈黙に包まれる。ナルトは自分が少しおかしいことに気付いていたし、サスケも少しおかしい。

「よ、おー人さん」

珍しくカカシがサクラよりも早く登場し、一人はぽかんと口を開く。呆気にとられたのは、カカシが早かつたから、ではない。

「先生、それってば浴衣……」

「やー祭だし。似合う?」

カカシは浴衣の短い袂を掲げて見せた。紺の浴衣は涼しそうだ。

「ん 何か別人っぽいってばよ」

「そういう格好するなら、せめてマスク取れよ。合ってねえ」

「どうも反応薄いねえ。折角こんな珍しい格好してんのに。先生が浴衣着てるのを見れるなんてレアだぞ、レア」

自慢できるぞ、と唆されたナルトは、半信半疑ながらもカカシに興味を抱いたらしい。だがそれを少し離れて眺めていたサスケは冷めた目をしていた。

「お氣楽過ぎてやつてらんねえ」

ぼそっと零れたサスケの声に、カカシが緩く隻眼を向ける。

「そう?」

「そうだろ。あんたも昔こんな事してたのか?」

「やけに突っかかるね、サスケ」

「祭だとか、チームワークだとかそんな温い事言つてる暇ねえんだよ」

「ちょ…サスケ!」

きつくカカシを睨むサスケに、ナルトは戸惑いを隠せない。

「オレにはあんたがこんな平和ボケしたようなモンに、喜んで参加してたとは思えない。勝手に押し付けるな」

「サスケ、やめろつて」

「お前だって修行するとか言ってただろうが」

「それは」

祭に行くのが恐かったからだ、とは言えずナルトは微かに唇を噛む。

「ショーガないねえ。そんなに言つならオレがお前らの頃の話をしやうか。確かに、オレはお前ら位の頃に祭には出てないよ」「え、そうなの？ 何で何で？ 友達とチームワーク深めたとか先生の体験じやねえの？」

「残念ながら子供の頃友達と祭に出た記憶は無いな。十一の頃は中忍として既に戦場に出てた」

「中忍？ そんなのアカデミー卒業した歳でなれるわけねーじゃん」「今とは時代が違つたって事だ。第三次忍界大戦の真っ只中だからな。五歳の頃には下忍だつたし、それが特別に珍しいって訳でもない。同期でも何人かそんなやつがいた」

「ゲッ…何だつてばよ」

「だからあの当時、里で祭をやつてたのかすらオレは知らない」

「……」

「戦争が終わつて祭をやれる頃には知り合いも友達も沢山亡くなつてたしな。それでふと思つ時があるんだよ、あいつらもここにいたらなあ、って」

ナルトもサスケも、黙り込んでしまつた。

「ま、折角の祭の日だし、オレは暗い話をしたいワケじゃない。た

だ、いつまでも変わらない事は無いし、次の祭に皆が揃つとも限らない。だから勿体無いと思つてな」

カカシが目を細めて居心地が悪そうな一人に笑い掛けた。

「さて、そろそろ行くか。サクラもやつと来たみたいだし」「

カカシの背の奥、道の向こうに少し歩き難そうなサクラがいる。白地に薄いピンクの花を散らした浴衣が、オレンジ色の太陽に染められていた。

「サクラちゃんーん！」

声に気付いたサクラが三人にその手を振つている。

＊＊＊

綿飴、りんご飴。

昔はそんなに嫌いじゃなかつた。
むしろ彼は樂しみにしていた。

光を放ち、夜空に打ち上がる花火。

背の低いサスケを、彼は肩車で特等席へと導いた。

汗ばむ掌と、熱。

人混みの中で逸れないようにと、彼はサスケの手をしつかりと握つてくれる。

兄さん、と呼び掛けと何だ、と言いながら足を屈め喧騒に掻き消えそうなサスケの声を拾う。優しげな黒い瞳の大好きな兄に、サスケは毎年夏祭へ連れて行つて貰つていた。

最後の夏祭は五年前、兄が里を抜ける一年前の事だった。

「オイ、サスケッつてば！」

「なんだよ」

「次はあれで勝負だ、勝負ッ！」

「てめえも懲りねえな」

「懲りて堪るかー！」

第七班を祭りへ連れてきた筈の力カシの姿は既に無い。少し酔つていたらしい、くのいちの集団に攫われた。それに文句を言つていたサクラも、途中で出会つた女子の輪の中に入り込んだまま、行方知れず。乗り気でなかつた二人組みが、今祭りの喧騒の中を練り歩いている。おかしなことになつたものだ。普段ならとうに喧嘩別れになつていてもおかしくない。それなのに、二人は何だかんだと言いながら、帰ろうとはしなかつた。

何より ナルトは、まだ誰にも咎められていない。多少棘のある視線を感じても、悪し様に罵られる事も力尽くで追い出される事もなかつた。

それが、ナルトの気分をハイにしている。
射的を二回やり、二回ともサスケに惨敗したナルトは忙しなく辺りを見回した。

「あ、あれだ！あれにしようぜーー！」

ナルトの指差した方を見て、サスケは軽く息を吐く。

「籠引き…？」

「オレ、やつたことねーもん。あれ！」

「ハア？ ねえのかよ」

しうがねえな、と言いながら一人はオレンジ色の電球を吊るした。出店に近寄る。法被を引っ掛けた壯年の男性にそれぞれ金を渡した。出店の壁には色とりどりの品物が並べてある。お面や花火といった子供っぽいものもあれば、さすが忍の里の出店、ちょっとナルトには手が出ないような、お高めの忍具なんかも置いてある。籤に書かれた番号と同じ商品が貰えると聞いたナルトは、じいと壁に目を凝らした。

「サスケ先に引けつてばよ」

サスケの意外そうな顔を受けて、ナルトはにじりと笑う。

「先に欲しい物決めといた方が当たる氣がしねえ？」
「……別に」

遊びだろうが、と脣の先まで出掛けた言葉を呑み込んで、サスケは少し草臥れた箱へ無造作に手を突っ込んだ。サスケにしてみれば、ここに並んでいる商品は特に欲しいと思うものでもない。忍具には流石に一瞬氣を奪われたが、目を通してしまえば大した物ではなかった。ウチハの蔵には幾らもある。もっと言つてしまえば、サスケにとってこの祭りは何の目新しい事も無く、全て知つているもの？だ。それでも珍しくナルトに付き合つてしまつたのは、少し前、あまりにはしゃぐのに呆れその理由を詫ねてしまったからかも知れなかつた。

『……実はさ、いつやつてちやんとお祭りに出たのは初めてなんだつてばよ』

怪訝な顔をしたサスケに、ナルトは慌てて両手を振つた。

『昔一回来た事はあんだぞ！でもそん時はあんまりキヨーミ湧かなかつたっていうか……別に祭りなんか良いやつて思つてさ。大人ぶつてたつていうか…あはははは』

『…ふうん』

言われてみれば、そうかもしないとサスケは思つた。写真で知る限り、サスケは四つの頃から五年前まで、毎年祭りに出ていた。勿論アカデミーの生徒達とも沢山出会う。だが、特に気に留めていなかつたが、ナルトの顔を見たことはなさそうだった。やたら威勢の良い店の男に、サスケが引いた札を渡すと

「はい、あんちゃん！16番だな！…」

見遣つた棚の16には煙玉が置かれていた。

「どーも」

受け取つたそれを掌に転がしてみる。一応本物らしかつた。万が一不発だと恐いので、実戦では使えないなと思いつつ、サスケはポケットにそれを入れた。

「オイ、まだかよ」

ナルトは未だ悩んでいる。いや、祈つているのとどっちだろ？か。彼ら以外の客が何組か現れ、先に籤を引いていった。そのたびにナルトの頬がぴくぴくと動く。

もう諦めて他の店に行くか、それとももう一回時間潰しに籤を引いてみるか…と思案していたサスケは、隣のナルトが大きく息巻いたのに気付く。

「『オーッシ！』決めたつてばよーーー！」

やたら派手に肩を回し、ナルトは先ほどサスケが手を入れた箱に腕を入れてガサガサと中身を搔き混ぜた。

「これだーッ！ー！」

「お、7番かい！」

店主が開封した籠をナルトに見せた。

「え…マジ？7番！？イヨッシャーーーー！」

右手を高く伸ばし、ナルトはガツツポーズを決める。

「坊主、これを狙つてたんかい？」

「そう！オレってばそのクナイセツトが欲しかつたんだつてー！」

「やるなあオイ！」

満面の笑みを見せるナルトは、ひょいとサスケを振り返つた。

「なあなあ！お前も欲しいもん貰えたのか？」

「あ？…別に特に欲しかつたつてワケじや…」

「へへへへへッ！なーあサスケ、オレってば狙つてたヤツマジで取れたんだぜ。オレ凄えだろ！なあなあ」

「……」

ナルトのでれでれとした顔が、見かけに寄らず好戦的なサスケを刺激しない筈も無く。カチンと来たサスケはポケットから出した小銭を素早く台の上に置いた。

「おっさん、もう一回」

「なんだよ、未だやんのか?」

「つるせ、黙つて!」

「んだとオー? おっちゃん、オレももう一回ーー! サスケ、お前何狙つてるんだってばよ」

「お前に言つ必要ない」

「それじゃ勝負になんねえだろー! 番号決めろよーー!」

「……」

箱の中に手を入れたまま、サスケはすっと棚を眺めた。

「25番」

「んじやオレは 33番ー!」

25番は起爆札、33番は大型の手裏剣だ。

「セーのッー!」

「坊主は博才があるのかも知れねえなあ

「くつくつく」

店主がまいつたと頭を搔く。流れで五番までやつてしまつた籤勝負は三対五でナルトの全勝で終わつた。五枚とも宣告通りの番号の籤を引いてみせるのだから、只事ではない。

「五回もやりや結果は平均化されるがな。坊主、マグレが重なつて良かつたなあ」

「マグレでも何でも構わねえってばよ。オレってばサスケに完勝だ

し

二回目は一人とも宣言通りで引き分け、三回目はナルトが塗り薬、サスケが花火セットで、渡されたサスケは苦い顔をしていた。四回目はナルトがカップラーメン、サスケが手甲で引き分け。五回目はナルトが再びクナイセットを手に入れ サスケは屋台の隅の籠に大量に挿してあつた、赤いかざぐるまを一本渡された。

「おーい、サスケ！ 次は……」

サスケは屋台の前で、その手に持つたかざぐるまを俯くようにじつと見ていた。オレンジ色の電飾が、赤いかざぐるまをじんわりと照らしている。

「サスケ？」

「……いらねえよ、こんなもん」

「はーあ？ お前が引いたんじやん」

「いらねえつつてんだろ！！」

憤るサスケの瞳は本氣で、手の中のかざぐるまは鋭い矢となつてナルトに飛んだ。

「あッ！…」

思わず腕で庇つてしまつたナルトは目を開けた時、サスケがその背を向けて人混みの中駆け出していくのを見てしまった。

「サスケエ！！」

人々の声、スピーカーから流れる音楽、鉄板とコテが擦れる音、ジ

コウジコウと焼ける焼き蕎麦の匂い。雑然としたものが生み出す喧騒がナルトの声を掩き消す。

「何で……」

ナルトは地面に落ちて、微かに砂埃が着いたかざぐるまを慎重に拾い上げた。

「追っかけねえのかい」

「……探してみる」

「あの坊主が置いてつたモンも持つてつてやれ」

「わかった。おっちゃん、ありがとなー！ 築楽しかった！」

ナルトは自分の戦利品をポケットに仕舞い、台の上に置かれた花火セットや手甲を一纏めにして抱え、人波を縫うように走り出した。

赤いかざぐるまが月明かりを浴びて、彼の手の中でゆるゆると回っている。

時折虫の声の聞こえる縁側に腰を掛け、静かにその姿を眺めていた少年は、奥から様子を窺う弟の気配に気付いた。

「ほら、サスケ。戦利品だ」

手招きされた弟は嬉しそうに駆け寄る。

「 ありがと、兄さん」

赤いセロファンのかざぐるまは、弟の手に納まつた。隣に座つたサ

スケは、薄い月光に羽を翳して遊んでいる。

「兄さんって凄いね！これで手裏剣も返り討ちにしちゃうんだもん」
「ははは。オレも初めてやつたよ、あんなこと」

夕暮れの頃サスケは里の祭りへイタチに連れて行つて貰つた。途中、酔っ払いにサスケが絡まれたのだ。手に食べ物や他愛の無い玩具を侍らせた男たちは、その格好とは裏腹に気が立つていい。人混みでその足を踏んでしまつたサスケを、執拗に声を掛けながら付け回して次第に人の気配の無い所へと追い遣ろうとした。サスケの謝罪など聞いてはいない。

綿飴を買つてくる、とサスケはほんの少しイタチと離れただけなのに、面倒な事に巻き込まれてしまつた。

(そつちがその気ならやつてやる)

アカデミーに入つたばかりの幼いサスケだが、勝気な部分を既に持つていた。柄の悪い三人の男達に追い詰められるフリをして、敢えて人気から遠ざかる道を選ぶ。

「さあ、どうしてくれるんだよ。坊主」

「お前に踏まれた所為で、足が物凄ツ「ぐく痛えんだがなあ」

広場の外れ、木の繁る丘の入り口の階段を背にして、サスケは漸く後ろを振り向く。

「オレは謝つたけど」

「世の中そんなに甘くはねえぞ。ゴメンナサイで全部済むと思つてんのか」

一やける真ん中の男にどん、と胸を突かれてサスケは後ろの階段に手をつく。手放してしまった綿飴が男等の足元に落ちた。

「あーあ、折角ガキがお小遣いで買つたんだろつじよオ
「へッ、残念だつたなあ」

笑う真ん中の隣面の男の靴の裏に詰られて、サスケの綿菓子が次第に萎んでゆく。

「詰はそれだけか」

サスケは立ち上がり、わざとらしく溜息を吐きながら両手の砂を叩いた。それを見下ろした男の顔が急速に醜く歪んでゆく。

「 どいつもこいつも生意氣だな、オイ。さつきのガキはどんだけ撲つても結局謝らねえ。このガキは謝つてはいるが、口だけだ。どいつも反省の色が見えねえな」

(わつきのガキ? 碌でもないな、こいつら)

自分その他にもこいつして因縁を付けていたのか。

サスケの侮蔑が混じつた顔をじっと見ていた右奥の男が、何かに気が付いたように目を見開いた。

「あ、オイ…この顔もしかして」
「あ?」
「コイツ、うちはの……」
「何イ?」

真ん中の男の手が伸びて、サスケの顎を掴み強引に上げさせた。指

の先からもアルコールの臭いが漂つてくる。

「触るな」

顔を顰めたサスケが男の手をきつく払い除けると、せせら笑いが混じった酒臭い息を顔に浴びせられた。

「言われてみりや、昔のイタチに良く似てるじゃねえか。その生意気にスカした所もそつくりだ」

「あの何考えてんのか分からん男の弟か？オイ」

「ケツ、いかにもオレたちやエリートですってシリラしてやがる

「……」

「知ってるか？アイツはなア任務で山ほど人殺ししといて、顔色ひとつ変えねえ冷血野郎だぜ。村ひとつ女子供もひっくるめて全滅させても普段通りだ」

「どうかしてるぜ、アイツはよお

「兄さんの事を悪く言うな！」

サスケはポケットに素早く手を入れ、叫ぶと同時に煙球を投げつけて飛び退いていた。懇意の忍具屋で手に入れた特製の胡椒入りだ。噎せ返る男達の苦しい呼吸と、夜空の下で白っぽく煙る一帯。

(フン)

喘ぐ呼吸を後ろに聞いて、サスケは立ち去りつとした。イタチが逸れてしまつた自分を心配しているだらうし、こんな所にいても何の意味もない。

「待て、『カラア！』

「！？」

突如、煙の中から伸びる腕に、足首を掴まれたサスケの視界が呆気なく回転する。

「一丁前に忍具なんか持つてやがんのかよ……」

咳き込みながらも体格差を利用して、髭の男はサスケを背中から押さえ込んだ。

「放せッ」

「フン、嫌な目で睨むな。ガキのくせに」

「……」

「お前もさつきのガキみてえに、動かなくなるまで撲つてやろうか」

「やつてみろ」

その声はサスケの口から出たものではなかった。いつからそこに居たのか、階段の上に人影がある。

「……！」

圧し掛かる髭面の男の顔が強張ったのがサスケに見えた。赤い頬が一瞬で青白く染まってゆく。薄れる煙の中で、漸く体勢を立て直した二人の男も同様だ。

「その子を放せ」

「兄さん！」

サスケがイタチの声の方へ首を捻じ曲げると、彼はゆっくりと階段を降りて来ていた。イタチがその手に見慣れない花束を持っているのが微かに見える。

「お前ら……やつらまえ！…」

「…」

男の怒号と共に、サスケは投げ出された。

酔つた勢いに任せ男達はイタチに飛び掛る。自身を取つたサスケが階段を見上げると、男等の手を離れ空を切り裂く手裏剣の歯が、月光に薄く反射していた。

「兄さん！…」

イタチの手元がすつと 動く。
スタタタタタ…

（何、今の…）

何かが軽い物音と共に地面や木の幹に突き刺さつた。音を頼りに探すと木の幹に見慣れぬ赤い花が唐突に咲いている。

（あれだ）

花はかざぐるまだった。

柄には黒い円盤。それが柄を軸にしてクルクルと回転している。円盤は手裏剣で、やがて力なく動きを止めると重力に従つた。イタチは手裏剣の中央の穴にかざぐるまの軸を通して仕留めたらしかつた。

「さて、どうしよう…」

一段、一段と返り討ちにした男達に近付くイタチのその手には、未だ数本のかざぐるまが残つていて。

「お前たち、これを　どこに通して欲しい？目か、口か。それとも他のどこか、か」

呆氣無かつた。

叫びながら逃げ去る者達には目もくれず、イタチはサスケの所に降りて来る。

「怪我は無いか？」

「……オレひとりでも大丈夫だったのに」

イタチはそこで、悔しそうに唇を尖らす弟に気付いて笑顔を零した。

「そりが、すまなかつたな」

「でも、ありがとう。兄さん」

へへつとサスケが笑うとイタチはこら、と額を小突いた。

「心配したんだぞ」

少しして、親と約束した時間にならうとしているのに気付いたイタチは、サスケを連れて綿飴を買いに祭へ戻った。今度は手を放さない。それがサスケには面映ぐ、くすぐつたい。

約束より少し遅れて無事に一人は帰宅した。サスケの服が汚れる事に気付いた母に見咎められたが、一人はクスクスと笑つて誤魔化した。

そして、今秘密を分け合つように、縁側で二人は赤いかざぐるまを風に回している。

「結構難しいよ… 手裏剣の穴に入れるなんて」

サスケは手に持ったかざぐるまを右手で構えて、土壙に向けて投げる真似をした。

「どこであんな修行したの？」

「してないさ。ただ本でそういうのを読んだ事があつて… かざぐるまを投げる技を持った忍が出てくるんだ。ヤシチ… とかいう名前だつたか」

「手裏剣に？」

「いや、苦無の代わりみたいなものだ」

「苦無なら何とかなるかも」

「おいおい、もう止めておけよ。それが最後の一本なんだから」

「ちえー」

兄が持っていたかざぐるまはあの広場の外れでサスケが使い切っていた。イタチの真似をして投げたのだが、幹にも地面にも上手くは刺さらない。そうやってサスケが幾度か遊んでいる内に、所詮は子供用の玩具で柔な作りのかざぐるまは、羽も柄もぼろぼろになってしまっていた。

この手に残った一本は、逃げていった髪の男が落とした物。思い返せば、帯の辺りに不似合いな赤いかざぐるまを挿していた。

「だからもう一度買おうかと言つたのに」

「あれ、買つたんじや無いって言つてたじやない」

「まあ 半分以上貰い物だ」

サスケはイタチを見上げてくすくすと笑う。サスケが聞いた所によると、イタチは逸れたサスケを探している途中で友人に捕まり、籠

引きをさせられそうになつたらしい。急いでいるんだとイタチは訴えたが、そこで野次馬も絡んでの一悶着があつて 誰の所為とは判らないような状況で屋台の隅に置いてあつたかざぐるまの籠を倒してしまつたという。結局、店主に捕まつた騒動の中心にいた数人は、羽が折れたり微妙に汚れて使い物にならなくなつてしまつたかざぐるまを、二束三文で弁償する破目になつたそうな。

「ついてなかつたね、兄さん。ちゃんと籤引きしてたらもつと良い物が当たつたかもしけないのに」

「オレがついてないのはいつもの事だ」

「え、ほんと？」

「ああ」

「そうかな。兄さんは凄いと思つけど……」

首を傾げたサスケにイタチは微かに笑つた。

「気にするな」

カラカラカラ……

温い風が二人の間を擦り抜けて、赤い羽を回す。

それが、兄弟で過ごした最後の夏祭の夜の記憶だつた。

＊＊＊

夜空に花火が打ち上がる。

拡がる光の粒と、少し遅れて届く複数の破裂音、火薬の臭い。祭も

そろそろ終盤だ。

友人達の目撃情報を頼りにし、広場の外れから高台へひつそりと延びる階段をナルトは駆け上がる。息を切らせて上り詰め、視界を塞いでいた石段が途切れると、短い草が繁る平坦で小さな空間へ出た。階段の両脇にずっとあつた林は控えめに後退し、そこだけがぽつかりと空いている。広場を見下ろせるような場所に小さな長石のベンチが一基。それ以外には特に人工物は無い。

そのベンチに見慣れた背中がある。服に染め抜かれた、赤と白の団扇。ナルトの後ろで花火がまたひとつ、ふたつと開く。

「 こんなところにいたのかってばよ」

「 ……帰れ」

「 オマエの忘れもん持つて来てやつたんだつー…いッ」

妙な声を上げたナルトだったが、そのまま？帰れ？といつ言葉など無視して短い雑草をざくざくと踏み、花火と共に背を向けるサスケに近付いた。

二人の背後で、またひとつ花火が上がる。

「 ホラよ」

背を向けるサスケに構わず、ナルトは腕の中の物をひとつひとつベンチに並べてゆく。

「 いらねえって言つて……」

サスケは目を逸らす前に、ベンチに伸びる擦り傷だらけのナルトの手を見てしまった。振り向いた場所に静かに立っていたナルトは、顔にも派手に痣を作っている。

ナルトはサスケの視線を無視して花火セットを置き、その上に赤い

かざぐるまを置いた。

「 んだよ、その顔」

「別…に何でもねえってばよ」

隠してはいるが、微妙に喋り難そうだったのは口の端を切ったからだ。

「……」

サスケはナルトと戻つて来た物を交互に観察する。ナルトの怪我は自分ですつこらんداにしては派手だった。花火セツトは端が燃れているし、かざぐるまも砂まみれになつてている。何があつた?と窺う瞳に、ナルトはやつといつもの笑顔を見せた。

「はは…ちょっとドロボーと間違えられただけだつてばよ。気にすんな」

目を見開いたサスケに、ナルトはサスケに背を向けた格好でベンチに腰を下ろし、大袈裟に腕を組んでその当時の分析を始める。

「オレはオマエが置いてつた景品持つて人ごみの中を走つてたんだけつてばよ。お前がどこいつたかわからんねえし、人は多いしで焦つてたんだ。手甲は結構かさばるし、他のも大きさバラバラだから落としちゃいけねーつて思つてしつかり抱えてた。それがまあ…ドロボーに見えちまつたつて事だ!」

「……」

「あ、でもよでもよ!勘違いされちまつたけど、止めに入つてくれた奴らもいたんだぜ。籠引いてるの見たつて。助かつたつてばよ」

ナルトが勘違いされた理由は、恐らくもう一つあるとサスケは思う。他の里の籠屋がどうかは知らないが、木ノ葉の里の籠は上手く当てれば元手の数倍から十倍近くになつて返つて来る。サスケの当てた手甲やナルトの手裏剣などがそうだ。勿論代金相応のものや、それ以下の物の方が圧倒的に多く、元手を回収出来る確率は低い。その籠の景品を必死で抱えて走るナルトを見て、悪い方へ勘違が起つたとしても不思議ではない。

「……」

ちらつと振り向いてサスケは悪い、と彼なりの居心地の悪さと申し訳なさを口にしようとした時だ。タイミング良く目が合つたナルトはサスケの顔を見るなり唸り、渋面になる。

「えーっとな、だから……その、サスケがそんな変な顔する必要ねーぞ！」
(变？)

一瞬我が耳を疑つたサスケは

「痛つて……！」

斜め後ろに腰掛けっていたナルトを突き飛ばしていく。

「ひるせえ、このウスラトンカチ……てめえこいつちが悪かつたと思つて……！」
「え……あ、それマジ……？」

ナルトはみつともなく地べたに尻餅を着いて睡然としている。

(「うちは悪かった、と思つて ）

嘘は無い。

過去に囚われたのも、その所為でナルトが泥棒扱いされたのも。

「 クソッ」

吐き捨てたサスケは顔を背けた。

「へへ…あははははッ」

「何 笑つてやがる」

微かな赤面に気付かれたかと身構えたサスケに、ナルトは大の字に寝転んで、夜空を見上げたまま呟く。

「なんか、オレ嬉しくなつちまつたつてばよ」

「は… ア？」

予想外の言葉に驚いたサスケがふつと振り向く。

里の方で連續した爆発音が続いた。鳴り止まない。夜空の一部が光に白む。

「花火つてさ、これで最後なんだろ? いつも家の窓から見てたけど、いつもやつて最後は派手に打ち上げやつて 静かんなる

「 ……」

これでもかとばかりに続く花火に照らされながら、ナルトは幸せそうに目を細める。

「誰かと一緒に見つけてのも中々良いもんだったんだな」

ナルトはほんの僅かにサスケの顔に苦いものが走った事には気付かない。

サスケが毎年、兄と一緒に祭の花火を見ていた事を、知らない。

「来年はサクラちゃんやカカシ先生とも見たいってば」

「お前はいつも先の事ばっかだな」

「だつて、過去は変わんねえってばよ。でも先はわかんねえ。過去と同じかもしれないし、変わってるかもしねーだろ」

パラパラパラッ…と地上から吹き出すように続いていた仕掛け花火に混じり、胎の奥に響くような音。ドオン…ドオンと一際大きく鮮やかに閃いた。

祭の最後を飾る尺玉だ。

やがて煌く礫の最後の残光が夜空に消えた。

「あーあ、終わっちまつたなあ」

余韻を残す大量の煙が薄い川になつて暗くなつた空を流れゆく。風に乗つて漂う火薬の氣配もじきに消える。

「早く来年になんねーかな。見晴らしの良い場所で見る花火ってあんなにキレイだとは知らなかつたつてばよ」

何時の間にか胡坐をかいていたナルトは花火の消えた夜空を名残惜しそうに見上げたままだ。

「…つて！何すんだよ！…」

何かが後頭部に当たつた。実を言つてしまえば、然程重くも痛くも

なかつた。だが当然の如く犯人はサスケだと断定したナルトは、勢い良く体の向きを変え噛み付いた。

普段ならこういう時、大抵不敵な笑みを浮かべている。

だが今は違つた。

きまり悪い 端的に言つてしまえばそんな顔をして、視線が微妙にナルトから逸れている。

「そんなんに淋しいんならそれやるよ」

「はあ ？」

ナルトは直ぐにサスケと自分との間にある物に気付いた。薄いビニール袋に入った、所謂手持ち花火のセットだ。

「これお前が当てるヤツじゃん」

「どうせこれもした事ねえんだろ」

「何で知つてんだ…？」つーかコレ、どうやってやんだよ」

「マジかよ」

「なあ、サスケつてば！」

「うつせーなーさつさと袋開けろー！」

「いーの？マジで開けて良いのかつてば」

「……こんなの、ひとりでやるもんじゃねーんだよー」

「はあ？」

「開けろって言ってんだーー！」

「お、おう」

覚束ない手つきでナルトが封を切る。台紙にテープで留められた色取り取りの棒がズラツと並んでいるのに、ナルトは目を輝かせる。

「蠟燭入つてるだろ。出せ。それから好きなの外せよ」

「なんだこのほつそいヤツ！っていうか何この先の薄い…紙？これ

つて縄つづーか紐だつてばよーこれつてホントに花火なのかー？」

「……人の話聞いてんのか」

埒が明かないと判断したサスケは、台紙の端に貼り付けられた細い蠅燭を外し、それを立てる適当な石を探した。水が無い事にも気づいたが、それはそれ。炎を操るつちは一族にかかるてはその処理などどうとでもなる と一般人には勧められない判断を下し、サスケは蠅燭に火を点ける。

炎に溶けてポタ…ッと透明な雫が落ちる。その上に蠅燭を立て、サスケはどれにするか悩んでいるナルトに声を掛けた。

「早くしねえと燃え尽くるぞ」

「げッ！待てつてばよー…つていうかこれどっちに火イ着けるんだつてばよー！」

「そつちだそつちー薄い紙の方を下にしる」

ナルトが恐る恐る手に持った花火の先端に火に近付けると、オレンジ色の炎が燃え移る。瞬く間に形を失つたそれは火薬の入つた部分に至つた。

シユオオオオ……

「うつわ、すつげーー！」

青白い火を噴出す先端にナルトははしゃぐ。

「色が変わつた！オイ、サスケつてばーー！」

「ああ、わかつたわかつた」

「サスケも火イ点けろつてばー！」

「…しゃーねーな」

面倒臭さそうな顔で、サスケは適当に蒲の穂を細く小さくしたような花火に手を伸ばした。

「あ、それ紙が付いてねえぞ」

「これはこれでいいんだよ」

燃え移る火が、黄色く弾ける花火に変わる。

「それ、さつき打ち上げてた花火に似てるってばよ。名前知らねーけど、降つて来るヤツ」

「しじれなんとかだろ」

「ふーん… なあサスケ。それ好きなのか?」

「……別に」

二人の手元を照らす花火はそれぞれの音を伴つて、白く、赤く、黄色く、青く燃え続けている。

手持ち花火を全部終えて、サスケと二人で後片付けをした。

言葉は殆ど無い。この状況が嫌な訳ではないが、面映ゆいを通り越して居心地としては最悪の手前の手前くらいだ。互いを直視しないまま、視線は相手の一部を意識している。そんな妙な沈黙が高台の頂上に満ちていた。

サスケの手は燃え尽きずに残った花火の残骸を、手馴れた様子で元の袋に入れていく。ナルトは拾い残しが無いかどうか、草に覆われた地面をチェックしていた。そして、偶々見てしまったのだ。サスケが塵へと姿を変えてしまつた花火と一緒に、あの赤いかざぐるまを入れようとしていたのを。

「ちよ…ちよっと待つたつてばよーー。」

「……んだよ」

「何で捨てちまうんだよーもつたいねえだろーー。」

「いらねえもんを捨てて何が悪い」

「なんでだつてばよ」

屋台の前のあの険悪な雰囲気が再び蘇りそうな、黙然とした間。破つたのはサスケだ。

「この子供の玩具だろ。いらねえよ」

「おまえにどつてはそつかもしれねーけど、でもー。」

「あんまり良い思い出じやねーんだよ、かざぐるまは」

「へ?」

(あ、そっか…)

二人が祭で別れたのも、サスケがかざぐるまを引き当てるからだった。

「昔、家の縁側で祭の日の夜にこいつで遊んだ。兄貴とな

「……悪イ」

ヒコーンシと鋭い音と共に、サスケの腕が閃く。はつとその先にナルトが目を遣ると、木の幹にあのかざぐるまが突き刺さっていた。

「すつげー

「……」

駆け寄ったナルトがかざぐるまを引き抜くと、柄は折れもせずに鋭

く刺さつていた。恐らくサスケはかざぐるまの先端にチャクラを通り補強したのだろう。

黙つてかざぐるまを見詰めていたナルトは顔を上げた。

「なあ、お前がいらねえつて言つんなら、オレが貰つても良いのか？」

「は？」

「このがざぐるまだつてば。コレかつこいいし それに

「好きにしろよ」

「へへつ、サンキュー！…」

「これ何の臭い…つて、やつぱシャツかあ？」

ナルトは自分の袖に鼻を近付けくんくんと嗅いだ。やはり 火薬っぽいとこつか煙っぽい臭いが染み付いている気がする。手に持っていた荷物を取り敢えず食卓に置き、Tシャツを脱ぎ捨ててから、ナルトは締め切つていた家の窓を開け放つた。出口を一つ作った所で、風が通り抜けていく。

少し雲が出て来た夜空に、もうあの花火の名残は無い。だが空を見上げるナルトの目には、高台で見た光景が鮮やかに焼きついている。

「あ…つと、花瓶花瓶……確かにこの辺にあつた筈だつてばよ」

窓を開けるために乗り上げていたベッドから軽く飛び降りて、ナルトは「いそごそとベッドの下のダンボール箱を漁る。

「んーつと……あつた！」

昔アカデミーでの課題で使ったそれは、どこからか拾つて来たものだ。良くな捨てずにつつておいたものだとナルトは自分に感心する。花瓶は表面がざらざらと埃っぽいし、拾つた時から既に細かな擦傷が付いていた筈だ。ナルトはシンクで花瓶を洗つて、なんとか見られる格好にした。中を軽くタオルで拭いながら食卓に立ち寄り、ベッドに乗り上げる。

湿つて透明感を取り戻した花瓶に、ナルトはストンと風車を挿して出窓に置いた。

「へへへ」

風を受けて、赤いセロファンの羽がゆっくりと回り出す。サスケが当てたかざぐるまは再びサスケに捨てられそうになつたが、結局ナルトの手に納まつた。

「やつぱもつたいねーつてばよ…うわ！」

吹き込む風に煽られて、細く軽い花瓶が傾く。がばつと両手で転倒を阻止したナルトは、暫し悩んだ末に食卓に花瓶を載せた。

カラカラカラ……

かざぐるまは変わらず回り続けている。

どさつとベッドに腰掛けたナルトは、吹き込む風を背に受けながら目を細めて笑う。

今夜は楽しい夜だつた。

多少痛い目にもあつたが、そんなことを忘れてしまつ程、特別な夜になつた。まだナルトの耳の奥にはスピーカーから流れる音楽と、夜空に打ち上がつた花火の音が残つてゐる。

初めて樂しんだ、木ノ葉の夏祭。

立ち食いした焼き蕎麦、力キ氷。初めての射的は惨敗だったが、籠はサスケに勝った。

昔のように追い出されることも無く、泥棒と勘違いされても、止めてくれる人もいた。昔では考えられなかつた事だ。

それに何より、今日のナルトはひとりではなかつた。

家の軒に切り取られることの無い打ち上げ花火も、火を噴く手持ち花火の閃光も、サスケと一緒にだつた。

手に残つた鮮やかに赤い羽根を持つかざぐるまは、ナルトにとつて今日の思い出を語るに相応しい品。

『「このかざぐるまだつてば。コレかつこいいし それに』

赤いかざぐるまはサスケのあの瞳に似ている、とナルトは思つからだ。

あの赤く廻る写輪眼。

サスケはかざぐるまに兄の姿を見てしまつらしかつた。

ただそれはサスケの話。ナルトにとつては、初めてサスケと一緒に過ごした夏祭を連想させるのに、これほど似合つものは無い。

サスケを彷彿させるかざぐるまは、卓の上で時折羽を休めながら静かに風を受けている。

「来年も… こうやって花火見たいつてばよ。今度は… サクラちゃんやカカシ先生… イルカ先生も誘つて…」

カラカラカラ…… カラカラ……

優しい夢が夜の窓からナルトの許へ流れ込んでいた。

Fin.

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1558n/>

かざぐるま

2010年10月11日08時16分発行